

玉手箱 延寶四 見れば氣のうきよ袋や花袋

女香屋

前の句は花の香をふくみ、匂袋なるをいひし歟、後の句は香囊を二、並べていひし歟、録して後勘に備ふ、此ほかにも浮世袋の句あれども考證に便なし、故に略く、毛吹草附合指南に、袋、傘、弓、浮世、乞食と見えれば、寛永より浮世袋はあり、傘袋、弓袋、浮世袋、こぶき袋と附合を教へし也、又世話盡三承應同指南に、浮世、月蝕、巾着、戯女ウツカレメと記す、承應より浮世巾着といふ物あり、浮世巾着は桔梗袋といふ物の類にはあらずや、浮世袋とは別物なるべし、

〔用捨箱下〕蚊帳に香袋を掛

誰袖の條にいひし如く、昔は香囊の類おこなはれて、匂袋を蚊帳に掛し事あり、

鹿驚集 明曆三年印本 つく花は匂袋歟蚊帳草

撰者 春清

信親千句 明曆元年刻 前句 人知れぬ匂袋歟夏の風 附句 釣し蚊帳の内うち外くらき夜

懷子 萬治三年刻 床近み目に掛物を心にて 是等の句おほくあり三句にして止

匂袋は蚊屋のすみぐ

撰者 重頼

是は高貴人の臥玉ふまうけなるべければ、今もさる事あるを、予種彦亭が知らざるにやあらん、又おもふに赤鳥の巻に、大島求馬の説なりとて、昔は遊女にたはるゝを、浮世狂ひといひしなり、傾城の宅前には柳を二本植て、横手をゆひ布簾をかけ、それに遊女の名を書いて、下に三角なる袋を自分の細工にして付しなり、是を浮世袋といひならはしたるなりといふ事を載られたり、是匂袋なるべし、風にあふちて自然香を散さん料なれば、蚊帳へ掛るも同事のやうにおもはる、昔は太夫ととなへし遊女は更なり、格子などいひて、それに次者も、伽羅を衣に留ざるはなきさまなれば、かゝる餘情もなしたるにやあらん、それが彼誰袖の如く、後には香類をいれず、布簾の縫留となりしなるべし、